

脚を斬られ、よく云へば、英敏果斷なる入鹿は斃れしなり。古人皇子（入鹿の妹、法提郎媛の子）は自の宮に歸りて「今日は韓國人が、入鹿を誅した」と云ひ玉ひぬ、又當時の童謡に「はるくに、ことぞきこの島のやぶ原」とうたひき。

○入鹿の屍は、父蝦夷の宅（現今高市郡高市村大字島庄）に送り葬祭を許され、哀悼を表することをも亦のされしが、其胴塚なりと傳ふるもの現今は、關西鐵道駅傍驛より、東南凡三十町なる、大和國高市郡飛鳥村大字飛鳥の南方なる畦畔の一隅に、青苔深く鎊ざせる、一個の五輪塔あり、高さ五尺三寸、笠の廻り六尺五寸、文字の見るべきものなきは憾めし。

自ら國政をとりおこなひし大臣入鹿！甘檜岡の第宅（址は胴塚より西南七町餘に在り）を谷宮門といひ、その子を王子とまで、いひし入鹿！

今や一碑わづかに雜草の間に立ち、一本の線香だに、手向くるものなく、農夫時に側に憩ふて、菴を薰らすのみ嗚呼。

序に記し置かん、高見山上には其首を祀られ、又歎傍驛の正西三明許に、高市郡今井町大字小綱と云へる處成、とありて右側に左右の手米八斗持舞數十遍、長丈六尺有三寸、力位五人世人稱無並者、相撲不能負鬼神得名、とあり、其傍に和歌あり、「萬人の力の運び菊月の末世に殘す念力の石」又左側に文政九丙戌九月冉石村高野堂山にありて、天保四已歲七月十七日寂すと記せり。

比婆山陵

出雲 岩 佐 東 岳



出雲國安來港を距る南へ三里、伯太川に沿ふ井尻村大字横屋にあり、河岸の石階を上れば宏大なる社あり、熊野神社と云ふ素美男尊を祀れり、其れより山道凡八町にして原野廣漠たり、四方を眺望すれば東は雲表に屹

密元の墓

愛媛 淡水生

享保年間伊豫國新居郡神山村大通庵（其頃大通寺と稱す）に密元と云ふ徳高き僧あり、法驗著しく諸方より聞傳へ加持禪石を乞ふもの多し密元是を煩はしきことに思ひ同郡荒川山の石窟に逃げ隠れ果實を食し毎日猿鹿等を友にして遊び暮し居りしに又もや其徳を慕ひ来るもの多かりしと云ふ、寶曆六年正月十九日其石窟にて病死す、墓は大通庵にあり、高さ二尺幅五寸程の長方形の御影石にして數多の墳塋のある其中に高さ八尺程の樹植付あれば探檢の便利宜し、今日に至る迄病患あるもの香花を供し祈禱すると云ふ。

力士仁淀川の碑石

高知 佐藤楠太郎

土佐國高岡郡高石村の内沖中島森本勝馬の宅前にあ

立して玲瓏煥發する伯耆の大山所謂出雲富士あり、北る手足の形ありて其下に仁淀川次郎兵衛、勢州森本、森本氏其先祖城主後當國元親君（長曾我部）任然百姓成、とありて右側に左右の手米八斗持舞數十遍、長丈六尺有三寸、力位五人世人稱無並者、相撲不能負鬼神得名、とあり、其傍に和歌あり、「萬人の力の運び菊月の末世に殘す念力の石」又左側に文政九丙戌九月冉石村高野堂山にありて、天保四已歲七月十七日寂すと記せり。

、安産を守護し給ふと傳へ四季參詣する妊婦絶ゆる事なしあるは即なり、其壯嚴なる神犯すべからざるの觀あり、當時此原野に四坊三神官ありて専ら祭祀を司りしか永錄年中回祿の災に罹り鳥有に歸せしと云ふ、地方の有志崇祖會を組織して會員を募集し社殿を改築して規模を宏大ならしめんとす、尙其山麓所窟に窟あり、時に刀劍古器を發見す、昔時土民の穴居せしならんと傳ふ松江より漁船の便を駆て安來港に航し其れより人力の車便あり。